

# 神奈川大学湘南ひらつかキャンパス開設 三十周年記念座談会記録

日時 二〇一九（令和元）年十月五日

場所 湘南ひらつかキャンパス11号館第一会議室

## 出席者

海老澤 栄一（神奈川大学名誉教授・元経営学部長）

大橋 哲（経営学部長）

木川 紘治（元平塚事務局事務部事務部長・事務局長）

北川 盛一（元平塚事務局次長・事務局長）

杉谷 嘉則（神奈川大学名誉教授・元理学部長）

中山 堯（神奈川大学名誉教授・元理学部教授）

三村 真人（神奈川大学名誉教授・元経営学部教授）

山口 和夫（理学部長）

司会 日野 晶也（常務理事・理学部教授）

記録 川口 好孝（神奈川大学資料編纂室）

木内 好信（神奈川大学資料編纂室長）

## はじめに

**日野** 定刻になりましたので、座談会を始めさせていただきます。本日は大変お忙しいところをご出席いただきまして、ありがとうございます。さて、本日の座談会の趣旨をご案内したお手紙でもお伝えしましたように、出典を忘れてしまったのですが、“Your story is our history.”という言葉があるそうです。SHC（湘南ひらつかキャンパス）の歴史を紐解くために、本日は皆さまがそれぞれの視点やお立場から見聞きしたお話を伺って、このキャンパスの誕生までの経緯と初期の様子を窺いたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

『湘南ひらつかキャンパス20年のあゆみ』という本が卒業アルバムや各種資料と一緒にお手元のテーブルの上に用意してありますが……。



写真1（上）、2（下）  
座談会風景

お手元にいろんな年の卒業アルバムが置いてありますが、一期生のアルバムはなかったんですね。でも、一番茶色いのが二期生の卒業アルバムです。当時を物語る資料としてデジタル化した写真をスクリーンに映しますので、順を追って見てゆきましょう。……いま、アルバム形式で残された記録に目を通しましたが、オーラルヒストリーとして記録に残したいエピソードや思い出、伝えたいメッセージ等がございます。まず、これまでにも歩んできた経営学部と理学部の歴史について設立前夜の昭和の時代までさかのぼって、当手を回想しながら語っていただきたいと思います。

### 学部の設立に先立つ研究所の開設

北川 私たちがこの両学部を立ち上げる時は、もう大変だったんですよ。

とにかくこのキャンパスができる前は、横浜キャンパスの中に知識情報研究所というのがあって、そこがもともとの母体だったんですね。それからこの研究所の開設から一年ほど遅れて、一九八七（昭和六十

二) 年の四月に平塚キャンパス整備計画室の部長としてぼくが就任して……。翌年の四月には発足の会をするということで、国際経営研究所の開設を記念して、「地球的視野に立つ企業経営」をテーマに、第一回目の国際経営フォーラムを横浜駅西口の横浜東急ホテルで開催しました。経営学部之母体となる研究所のね。

日野 知識情報研究所は平塚キャンパス計画具体化の第一歩として一九八六(昭和六十一)年の七月に開所式を行い、その後も引き続きフォーラムを定期的に開催しているわけですから、国際経営研究所が実際に始動するのは知識情報研究所よりも……。

北川 ちょっと、後だったと思う。で、このことは木川さんの方がよくご存じなんですけれども、私が就任した頃には、それこそ藤原鎮男先生と山田敏郎先生、それから、ここに出席されている中山先生もいらっしやったかな。知識情報研究所の研究員として来られて。先生は最初からでしたっけ。

中山 いや、最初からではないですね。

木川 井上先生ですね。

北川 井上勝也先生ね。

山口 もう亡くなられましたね。

木川 正式には、知識情報研究所の開設が一九八六年の五月で、同年の十月には国際経営研究所ができるわけですが、ただその前に、藤原先生以外にも数名の先生方がおられたように思います。知識情報研究所の前身のようなものって、あったんじゃないかと思うのですが。

北川 あったと思う、おそらくね。だけど、ぼくが就任した時には、知識情報研究所の活動を支え、理学部創設のために尽力された、初期の頃からの功労者である、あの、お三方がおられた。

#### 学部名称について

杉谷 学部名称のことについてなんですけれども、私は、知識情報学部というのが当初の案だったのかな、と思ったんですけれども。それは違いますか？

北川 いや、それが案だったんですよ。文部省に一番最初に出したのは知識情報学部。

杉谷 やっぱり、そうですね。

北川 で、物質……。物質……。

山口 物質科学科。

化学は多分、一つだと思えますよ。だから、五学科

五百人ですから、数物系が二つで、生物と環境なんかで全部で五つあったと思います。

北川 経営学部も国際経営学部で申請しようとしていたんですよ。

大橋 いまおっしゃっている学部名称が変更になった経緯については、この『国際教育の実践・神奈川大学経営学部十年の軌跡』に詳しく書いてあります。

杉谷 経営学部の場合は、国際をつけてね。

北川 国際経営学部っていう学部名称で設置認可を受けるはずだったんです。理学部の方は知識情報学部という名称で。

三村 当初は、国際経営学部の名称で開学六十年を記念して新学部を創設するということでした。経営学部の場合は、文部省の設置基準に基づいて経営学部の名称で発足することとなりましたけれども、国際の名称は学部発足後に文部省と交渉を行い、実現することとした、と聞いています。

その点、私が勤務していた前任校と非常に似ています。行政は過去の事例・基準を重んじるようです。現在は改善・進歩していると思います。

北川 理学部の方は知識情報学部で申請したんです

よ。ところが、両方ともそんな学部はないって文部省からきつく言われて、それで、いまあるような学部の姿に……。理学部は三学科だったんですよね。情報科学科と化学科と応用生物科学科の三学科に、国際経営学部の方は経営学部になって、学科名なら許すということで、国際経営学科になったんですよ。

ただ、私から言わせると、当時の陣容から見ると、むしろ国際文化学科みたいでしたね。海老澤先生、先生の方がご存じじゃないですか。

海老澤 ある意味で、曖昧なまもりだったから。人文系から全部入っちゃうんで。

北川 一般教養を引き受けたもんだから、余計そういう色彩が強くなりましたね。

木川 当時の文部省の方針といえますかね、非常に厳しい時だったんですよね。設置基準というのは、一つの学部をつくるのに、この分野からはこういう科目、この分野からはこういう科目というように、分野ごとに必修科目が決められていました。いまのようにいろんな学部がつくれる状況ではなかったわけですよ。法学部とか、経済学部とか、商学部とか工学部・理学部といったような伝統的な学部の基準がずらっと並んで

いる……。で、結局、国際経営学部なんてのは文部省でも初めてのことで。知識情報学部なんてましてないでしょ。だから、そういうものをつくるには、新たに設置基準そのものからつくっていかねばならないから、時間がうーんとかかりますよっていうような話だったんですよ。そのように私は聞いています。

**日野** そうというような脅され方といったら、おかしいけれども……。

**山口** そういった学部というのは、おそらく国立にもなかったわけですよ。実は、一九八八（昭和六十三）年に知識情報工学課程というのが豊橋技術科学大学の工学部に新設されているんです。しかし、この場合も、知識情報工学というのは課程の名称であって、学部の名称ではないわけです。国公立にあれば、あつ、あるじゃないですかと言って、受け入れるかもしれないけれども。ないような名前を私立大学、何事だと言わんばかりじゃないですか。

**北川** 歯医者さんの大学の場合も、そうなんですよね。国立に歯学部っていうのはなかったんですよ。それが東京医科歯科大学かな、それが初めての国立の歯の学部だったわけですよ。それ以外は認めない。文学

部でも基本は哲史文でないと駄目だった。要するに、哲学と歴史と文学と、このカテゴリーから外れるものは認可の対象になりません、というようなのが文部省の設置基準の基本だったんですよ。

**杉谷** 私は、筑波大学は国立だからしょうがないけれども、こちらは私学だから学部の名前とか、いろいろもつと自由があると思ったのに、何だ、私学、私学って言いながらも、文部省向きっぱなしだなあ、という印象を当初から受けていました。

#### 申請業務を回想して

**北川** 実際の設置認可の事務に当たってくださった木川さんなんかは大変な思いですよ。

**木川** でもね、私は、両学部の設置認可についてはそんなに関わってないんですよ。

**北川** あ、中河原資章さんでしたっけ。

**木川** 中河原さんは農地転用に関わる申請を最初の一年間進めてきました。その後、中河原さんから引き継いで、村上三男さんを中心として一次申請、二次申請を行って……。で、その頃、北川さんが長で、責任者としておられた。私はその頃、夜間部にいたんですよ。



写真3 造成中の平塚キャンパス（1988年4月）

北川 ああ、夜間部にいたんだね。

木川 でね、一九八八年ですから、二次申請前の四月一日付で、夜間部との兼務辞令をもらったんですよ。だから、その頃は、朝八時三十分からは出勤できなくて、出勤するのはだいたい十時頃。夜間部は夜十時までですからね、一年間そういう勤務形態が続いたものですから、二次申請の時は申請書類のチェックぐらいしかやってないんですよ。

一九八六年に農地転用の申請をまず最初にやった。あの頃は学部設置には最短でも二年かかるんですよ。第一次の申請をして、それでOKになれば、次の年度に、第二次申請をする。だから、農地転用からだと順調にいても申請を始めて三年かかって、ようやく認可となるわけです。

北川 ほくが就任する直前の一九八七年の三月三十一日に新学部に関わる申請計画書が文部省に受理されているんです。その後、本申請に向けて、申請書類の作成が進められ、一九八七年七月に第一次設置申請が、一九八八年六月には第二次設置申請も受理されて、一九八九（平成元）年四月に新学部は開設を迎えるわけです。

## 難航した新学部の設定

北川 就任前のことですけれど、まだこのキャンパスが小山だった頃の話です。さつきスクリーンで見た映像みたいにあんなふうに整然となっていない時ね。一緒に来てくださって言われて、加賀尚根さんだとか、久保肇さんだとか、常務理事の出海寛さんと、丘の上から現地を視察したんですよ。で、ここの開発を手掛けることになるのかなあと、その時、感じました。

ただ、呼ばれて来るのに一年待ってもらいました。就任要請があったのを、一年遅らせて日本私学振興財団（現・日本私立学校振興・共済事業団）からこちらに来ました。その時はまだ何もなかったんですけれども、ところが、来てみたら、農地転用のための金繰りだとか、そういうことが大変で、しかも、それこそ……。中山先生はご存じかな。あつ、海老澤先生の方がこの件ご存じですね。大学の評議員会でここの両学部の設置に対して反対の勢力というのがものすごく強くて。ぼくなんて、何のためにここに来たのか、と思うぐらい、激しい抵抗でした。

杉谷 反対の勢力というのは、この辺の人たち、住ん

でいる人たちですか。

北川 大学の……。

日野 横浜の先生。

杉谷 ああ、そう。なるほど。

北川 もう、大変だよ。

杉谷 平塚問題って、やつですね。

北川 そう、平塚問題。

木川 平塚問題というよりも、この地に設置すること自体反対でした。

海老澤 地元を、足元を固めてやらないと、全部駄目になっちゃうという危機感があったんだよ。議論の途中で、トイレに行くついでに電話しちゃうんだよ。だから、会の終わった頃には、新聞社に情報が流れていたんですよ。翌日の朝の新聞には新学部の設立でもめているという内容の記事がバースと出てて。

日野 ここに、いろいろな資料がありますが、この『神奈川大学60年のあゆみ』というのは……。あつ、そうだ。六十周年の時ですよ、平塚キャンパスができたのは。

北川 そうです。そう、六十周年。平塚キャンパスは六十周年記念事業として開設されたんです。それで初



め、いまでこそ、号館の名前が変わっているけれども、初めは全部60がついたんですよ。

**日野** だから、60何号館なんですか。

**木川** 61から62っていうようにね。

**北川** 意味づけがあったんですよ。

**日野** そう、この建物ができた頃に号館名が変わりましたね。ここはSHC開設二十周年を記念して建設された、いまの呼び方では11号館なんですけれども、横浜キャンパスにも11号館があつてね、よく混乱するんですよ。

**北川** このキャンパスはどっちかというと、難産ですよ。逆子みたいなもんですよ。だからね、みんなから祝福されないで。そして、蓋開けて二、三年したらこの平塚キャンパスの登記ができていなかったということで、それで、文部省から叱られて。叱られ役はいつも私なんです。当時は自己資金が八十パーセントぐらいいないと認可が下りなかったんですよ。自分の金で買っていないんだから、登記できないでしょ。それで、登記していないということが知れて、大学院か何かの認可の時に、認可にならなかったんですよ。

**木川** 大学院の全部終わった後です。

**北川** ちょうど、あれは衣笠洋輔先生と野口嘉文さんが理事長を交替した……。

**木川** 平塚問題ですよ。

結局、文部省への申請は、財政的な面と教学的な面の二つに分かれていて、いわゆる財政面に關わる部分は教学面とは別の部署に申請する。北川さん以下、われわれ設置に關わっていた者は財政の部分を除いたところを全部關わってきたわけです。だから、後に問題となったようなことは何にもわからない中でずーつとやってきました。

**山口** だから、できたんじゃないですか。

### 理事長の果たした役割

**杉谷** でも、そういうゴタゴタがあつても、最終的にここでスタートさせるぞと決断した、当時の菅野理事長の力は強かつたんでしょうね。

**木川** 新学部設置については、横浜キャンパスの全学部で反対の声が多かつたです。菅野理事長は反対している学部教授会に行つて、設置の必要性を説明し、説得されたんですよ。

**日野** 理事長が教授会にいらしたんですか。



木川 ぼくは平塚キャンパス、絶対反対だったんですよ。なぜかというと、自分の生まれ育った平塚ですね。一番の問題はこの立地の悪さだったんです。

北川 平塚のチベットと言って……。

木川 拡大すること自体もどうかと思った。その頃は文部省の推計によれば、ちょうど一九九二（平成四）年が十八歳人口の第二のピークだったんです。それに降はずーと下がっていくじゃないですか。だから、文部省の拡充計画っていうのも、定員増については、一九八六年から一九九二年までを「新長期高等教育計画期間」として、その間の恒常的定員増は、四万二千人というのを最大限としたんです。そのほかに四万四千人の期間を限った定員増、いわゆる臨時的定員ですよ。これを上限として認めていく。ですから、設置認可申請そのものが非常に厳しい時だったし、この時期になぜ平塚か、と思ったわけです。

菅野さん何回か話しましたよ。結構ね、ぼくみたいな者にも、話しに行くとき気軽に会ってくれるんですよ。当時の菅野理事長の考え方は、私学を取り巻く経営環境を考慮してのものだと思うのですが、大学というのはいまのこういった状況を見てみると、現状維持

であるとか、縮小だとかっていうような、そんなことでは発展することはあり得ない、と言うんですよ。拡大しかないんだ、と言っていました。その考え方は菅野さんの経営者としての考えであって、だから、平塚をつくるんだ、絶対につくるんだっていう、強い意志が、……本気でしたよ。後に神奈川大学の財政が悪化していき、大野泰理理事長のもと、財政再建を進める中で思ったことですが、やっぱり臨定だ、定員増だとガムシヤラに拡大してきた菅野さんのやり方が結果的に大学を救うことになったのかな、と思いましたよ。

実際に、小泉政権の規制緩和の時代になってくると、臨定が、神奈川大学の恒常的定員増の整備に役立っているんですよ。安定的な定員確保のために人間科学部をつくったり、臨定を実員の定員化していく……。そういう段階で申請ができたのは菅野さんのお蔭というか、菅野さんの積極策がなければ、できていないんですよ。

北川 そのとおり。そういうことが言えるなあ。

杉谷 ぼくもねえ、理学部にさらに新たな校舎を建てようという時に、当時、藤原先生がまだ理学部長だった頃と思いますが、ここに菅野さんが見に来られて

ね、ここにしようとおっしゃった。その一言で決まったということをちらっと聞いたことがあるんですよ。理事長の力というのはすごいんだなと、感心したことがあったんですよ。

それから後は、まあ、菅野理事長、設立後においても何か必要な会合があるよね、いろんな人と久しぶりに会うじゃないですか。そうすると、「やー」なんて言いながらハグですよ。最近、あんまり見かけないけれども、そういうことをやるから、大物なんだなあ、と思いましたよ。「あー、久しぶりですねー。お懐かしい」なんてね。いろんな人とそうやっているの、私、見かけましたよ。そんな場面、この頃、見かけないけれども、そういう方だったんだなあ、と思った記憶があります。

### 教員の選定と教員審査

杉谷 まあ、それにしても、理学部関係は藤原先生が本当にrippな先生方を引っ張ってこられた、という思いがあるんですね。スタートの時ばかりか、その後も、しかるべき先生を呼んできてくださった。

それはそれとして、先生は一高出身なですよ。

で、寮生活をしていたから。いろいろな仲間がおられて、それを藤原先生は百パーセント利用している。一高の時代と東大教授時代の交流ね、みんなその関係ですよ。それで、それがサイエンスの関連でもそうだし、ちよつとした趣味の範囲でもね、ああいう、その昔の一高の寮生活の関係つてのはね、まあ、よく作動してきたんだなあ、と。みんなそれが、それぞれがトップになって、トップ同士はトップになってからもね、「やあやあ」みたいなね、そういう関係で結ばれている。だから、あれは日本のために非常にプラスに作動しているなあ、と。そういうトップがね、そういう昔の、いまだって、それはあり得るけれども、あんな昔ほどはね、旧制高等学校っていうんですか、藤原先生を見てみると、いい意味で百パーセント利用していると思う。

北川 理学部の教員審査の中でアウトになった人は少なかったよね。

木川 そうですね。逃げられたのはありますよ。

北川 アウトになったのは経営学部にはあったよね。

海老澤 その曖昧さは国際をつくる……。

北川 経営学部としての成り立ちです。国際はむしろ

ね、二の次でしたね。国際の分野で教員審査されるってことはなかった。もっぱら経営学っていうカテゴリーの中で審査される。

木川 そうですね。

日野 二次以降の話かもしれませんが……。最初から国際経営学士という学士号で卒業しているんですね？

大橋 確かに、一期生が入学した時の履修要覧には経営学士となっていたのですが、彼らが卒業する前の一九九一（平成三）年七月に学校教育法および学位規則が一部改正されたことを受けて、実は、一期生から学士（国際経営学）の学位を授与しています。

時代に先んじた学部構想

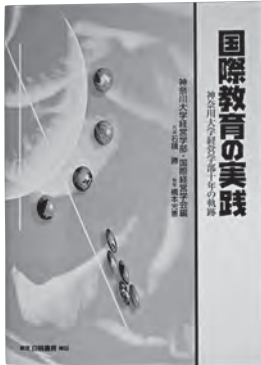


写真4 『国際教育の実践』

大橋 さきほどからおっしゃっていたように、なことが、この本に……（写真4）。

出版されたのは開設十一年目のようです。『国際教育の実践』というタイトルで、「神奈川大学経営学部十年の軌跡」という副題を付したこの書物に、編者は神奈川大学経営学部と国際経営学会になっていますが、箕輪成男先生がお書きになっている部分の中に述べられています。「はじめに」というところで、「真っ白なキャンバスに思い通りの絵を描いてください」と男心をくすぐる菅野敏雄理事長（一九九七年歿）の殺し文句に、すっかりその気になり、新キャンパスでの新学部創設を担当することになったのは一九八五年（昭和六十）の夏のことだった。筆者を菅野理事長に紹介されたのは、わが学部と並行して理学部創設に当たられた藤原鎮男先生である」と、新学部の創設を担当するようになった経緯が語られています、文を読んでいきますと、経営学部になったのは国際経営学部が認められなかったからだ、と——かなりその辺の制約があった、ということが書いてあります。

木川 箕輪先生の初めの構想というのは、当時の設置基準からすれば、まったく文部省から受け入れられる

ようなカリキュラムではありませんでした。箕輪先生の理想とするものを示されたと思っています。大変興味深い内容だったことを記憶しています。こうあるべきとか、そういうものを自分の構想として持つておられたんですね。規制緩和後であれば実現できたものと思います。

**北川** いま木川さんがおっしゃったように、構想としてそういう構想だったもんだから、にわかには経営学部になったもんだから、経営学部を中心にした教員集めができてなかったんですね。

**木川** そうでしょうね。

**海老澤** それで、ぼくにも声がかかった。短大の商科にいたんですね。

**大橋** やはり経営学部という名前にする必然性は、箕輪先生の文章からはあまり窺えないのです。箕輪先生の前任校だと思いますが、国際文化学科というところにいらつしやったようで、「教養教育中心の、どちらかというと実務性の乏しいカリキュラムに、学生諸君がとまどっているのを観察していた」と書いてあって、その辺から実務系のことを考えて、経営学部がいいのではないかと考えていたけれども、彼自身は「実

は国際人養成に主眼があったから、いかなるディシプリンを選ぶかはそれほど筆者にとって重要ではなかった」と書いているのです。で、その辺のことからも、カリキュラムにもおそろくいま木川さんのおっしゃっていたような流れが反映されていたと思いますし、いまもある学部の特徴だと思います。

**北川** ある、ある……ありますよね。

**山口** みなとみらいへ移ろうというこの時に。

**木川** ぼくは、規制緩和以降に、学部名称を変更するチャンスはあったと思っています。

**海老澤** そういう可能性もあったんですね。

**木川** チャンスとしてはあったと思う。あの時、なぜ国際経営学部になかったのかなあ……と、いまもっと思っています。

### 充実した教授陣と就任前後の状況

**木川** 私が記憶しているところでは、開設した時っていろいろ見学者が多いじゃないですか。ある時、図書館情報大学の先生がみえたことがあるんですよ。その時いろいろ話されたことを耳にしたのですが、この大学にコンピュータの神様といわれる人が二人いるっ

て言うんですよ。だから、うまくいくんだって。それが村田健郎先生と後藤英一先生なんですよ。

杉谷 そうですね。

木川 確かに、杉谷先生がおっしゃるように、理学部の教授陣容に関しては、いろんな人が驚いていましたけれどね。

日野 中山先生はいつ頃から声がかかりましたか？

中山 ぼくが来たのは一九八八年なんです。開設の一年弱前で、あまり知らないんです。いま皆さんがおっしゃったような話はほとんど知りませんし、知識情報研究所の様子を話してくれと書いてありましたけれども。ぼく自身も、そんなに常時行っていたわけじゃなくて、四、五人の先生が机を並べておられて……。寺本俊彦先生だとか、宮澤弘成先生とか、あとは、武内義尚先生ですか。

山口 杉谷先生はその頃、一年ぐらい前だったら、何か参加してらっしゃらなかったんですか？

日野 フォーラムといましたか、セミナーみたいなものをやってらっしゃらなかったですか？

杉谷 ぼくは完全にスタートしてからです。

北川 そうすると、一九八九年。

杉谷 一九八九年にスタートして、学生は入ってきたけれど、授業はなかったっていう、あの時からですよ。

日野 一年生しかいませんから。各学科五十人ですから。

海老澤 経営は何人だったんですか？ スタートの時。

木川 経営の定員は二百人。

山口 それは半分ぐらい削られたんですか？ 申請の時に。

木川 そうですね。四百人を二百人に。文部省との折衝の段階でそういうことに……。

### 当初計画に描かれた新キャンパス構想

木川 菅野さんはここをつくる時、六千人構想というのを持っておられたわけですからね。

北川 それでね、体育館を見てもらったらわかりますけれども、横浜の体育の授業もこっちでやる予定だったんですよ。だから、そういう構想だったんですよ。

日野 だから、それで。こういう時に伺っておくもんですね。そうですね。

北川 それで、あれだけのグラウンドをこしらえて、体育館も割に大きいでしょ。で、体育館の便所を見てください。一遍にグラウンドの向こうから学生が来て、そしてバスに乗って帰るんだから。したくなつた時、三つや四つのじゃ足らんだろうということで、体育館にあれだけたくさん unnecessary 便器があるんです。

杉谷 バスのスタートする62号館の所も。

北川 62号館も便所の数は多いですよ。住人の割に。それはね、こっちで授業するという構想があつたものだから、そうしたんですよ。

杉谷 テレホンカードね。当初のね。あれ見て、こんなりっぱなビルが建っているということ……。

日野 覚えてますよ。

海老澤 幻のタワー。

杉谷 テレホンカードに釣られて、間違つて来ちゃつたよ。なんて、冗談を言う人もいたくらいですからね。こんなりっぱなビルがあるということ。

日野 模型もありましたよね。

北川 学部長室かどこかにあるんじゃないですか、いま。

木内 いま、資料編纂室ですね。

日野 資料編纂室にあるんですか。資料編纂室長の木内さんの指摘なので、間違いないでしょう。横浜に持っていったんですね。

北川 だから、もう、そういう時代があるんですね。

木川 結局、当時の設置基準の厳しさなんです。横浜で定員を増やそうとしても校地も校舎も足りない。



写真5 テレホンカード

海老澤 目一杯だったんですね。

木川 校地についてはこれだけの定員に対して、これだけの校地面積が必要なんだという基準があるんです。中山の校地も運動施設として認めてもらったんです。実際に、体育の授業を年に何回か、やってももらったんです。そういう体制をとらないと、文部省は認めてくれなかったし、その一環として、文部省は平塚キャンパスも同一キャンパスとして認めてくれた。平塚キャンパスの新学部は別大学じゃないんですよ、ということとはよく言われましたよ。

北川 そうですよ。わかります。

山口 上智大学だってね、上智大学だって、結局はあそこは短大だけなんですけれど、つくる時には結局そういう話でやったんですよね、おそろくね。もう、ちょっと古いですけどね。

北川 だから、多分、建物面積の六倍の土地がないと駄目なんだ、と言われた。それが半分の三倍に緩和されたんですよね。

杉谷 そういう話が出てきたことがありましたね。

条件は厳しかったけれども、ここをつくるについては、やはり、あの平塚市の計画、新しい道路ができる

とかいう。中沢橋あたりから道路を拡張して……。ああいう計画があったことも励みになったんじゃないですか。

木川 ばらの丘ハイテクパーク構想ですね。

杉谷 そう、そうです。

### 地域との融和を目指して

北川 いま市の計画ということで、平塚市の話が出ましたけれども、ぼくは当時、平塚事務局の局次長だったのかな。こっちへ来る間に、木川さんに来てもらうことに決めたんですよ。一番反対していたね。それはなぜかというと、やっぱり平塚大事でしょ。だから、平塚在住の土方敏裕さん、それから高橋規則さんにも頼んで力になってもらいました。この三人がどれだけ頑張ってくれたか。病院をどうするかとか、下宿はどうするかとか、学生生活の観点から交通問題を含めていろんなことを固めていった。

木川 この地域の各種役員で構成された、神奈川大学対策協議会というのがあったんですよ。

北川 交通の便とかいろいろ考えて、学生に車両通学を許可しているわけなんですけれども、学生が車で来



るのは困るとかね。とにかくね、地域住民との話し合いが大変だったんですよ。

山口 あの当時は、日向岡のトンネルもなかったですからね。

北川 あそこにトンネルができて、あれで五分ぐらいかな、短縮されたのは。

日野 いまはノンストップのバスも通ってますよ。

木川 平塚市のばらの丘ハイテクパークの構想では、あのトンネルをずーっと延長して、琵琶地区を通って大学の裏の所から秦野中井のインターまで行く大きな道路をつくるという構想があったんですよ。ばらの丘ハイテクパーク構想の中に示された事業計画によれば、このキャンパスの裏にはスタンレー電気の研究所、キャンパスの前には大成建設の研究所ができる予定で、地域への説明会が何度かあって、当時、事務局でも出席しているんですよ。ところが、バブルがはじけてそういう計画は一切なくなってしまった。結局、進出してきたのは、吉浜にある神奈川県農業技術センターだけですよ。

北川 高梨乳業も来るとか言ってた。高梨乳業で思い出したけれども、地域住民の話し合いで、座禅川に汚

染物質が流れているという指摘があつて、それで、それが問題になって、神奈川県大学が吐き出したんだと言つて、地域住民がそれこそデモじゃないけれども、押しかけてきて。でもね、ここの排水の設備は万全なんです。そんなことは絶対にない。それで、調べさせたらね、この辺の牛の糞尿害だったんですよ。農家で飼育している牛の尿が流れて、汚染されていたということが最終的にわかった。だから、そういう対応も大変だったんですよ。

杉谷 地元の方は好意的だとばかり思っていましたけれども、そうじゃなかったわけですね。

木川 当初、地域の人たちからは神奈川県大学が来たっていいことなんて何もないって、何回も言われましたからね。

杉谷 だけど、ここの土地の方で小清水さんって方がおられたでしょ。「里山をよみがえらせる会」の代表で、お元気な頃は「山の体験学習」でも講師陣の一人としてお世話になっていた方がおられましたよね。あの人なんて、何ら悪いようなこと言つたことはないし、非常に好意的でしたよ。

木川 そういう人もいらつしましたけれど。

大学に好意的な人といえば、この周辺に何人かいるんですよ、うちのOBで在学中に箱根駅伝を走った人が。開設当初から体育館におられた関野積夫さんもそのうちの一人です。

北川 あの人、走ったんですか。

木川 走ったと思います。

杉谷 神奈川大学が来るってんだから、喜んだんじゃないですか。

北川 そうではなかったんですよ。それで、村祭りの時に、酒を届けたり。それから、盆踊り。

日野 いまでもやってますよね、駐車場で。

北川 盆踊りのために、駐車場を貸したり、なんかして。できるだけ仲良くやってゆこうという。

このキャンパスの中に湿地帯というのが三つあるんですよ。この下と造成してホタルが出る所。湿地に造成した所ですよ。それとも一つ、土屋の杜の方にあるんですよ。ですから、環境アセスメントとの絡みで地域のことを考慮して環境の保全をする、生態系の維持に努めるとか何かっていうのも、これも課題だったんですよ。

三村 こちらの方は、平家か何かの落人の末裔がいる

と……、そういう話を聞いたことがあるんですけども。やはり、そうなんですか。もしそうなら、いわゆる人たちと従来からいる人たちと違うと思うんですけども、そういうことで、やはりトラブルがあったんじゃないですか。

北川 あったんですよ。村同士のトラブルの中に、われわれが巻き込まれるという、そういうことがありますね。そういうことはね、先生方のご存じない世界ですけども、事務系というのは割とそういうことばかり、悩まされてます。

木川 七沢に県の自然環境保全センターという所があるんですよ。このキャンパスは造成する時に、環境アセスメントが非常に厳しかったわけですね。それらの多くは、施設課の人たちが対応したんですよ。保存湿地だとか、保存緑地の整備だとか、開設後も七沢の自然環境保全センターから毎年検査に来るんですよ。とくに樹木とか植物をね。あそこの木が、一本枯れている、と。ここは必ず植えかえてください、と。で、一本枯れたら、一本植えるわけですよ。次の年にまた来て、あつ、植えましたねって。そういうことがね、ずーっと続いていましたよ。

**日野** 実のなる木もありますよね。

**北川** 山本晴彦先生が詳しかったですからね。好きでしたよね。土屋の杜の中にオニノヤガラという珍種の薬草が自生しているのを見つけて、その場所を山本先生が教えてくれたこともありましたよ。

### 「一日大学生」の開催と地域との交流事業

**木川** さっき、地域の話が出ましたけれども、ちょうど大学院修士課程の完成年度に当たる一九九四（平成六）年度に、「一日大学生」というのを始めたんですよ。理学部・経営学部にも、いろいろ協力していただきました。それはね、地域の理解を深める対策の一つでした。土屋小学校に長谷川先生という校長先生がおられてね、子供たちは、ここで大学をいつも眺めているんだけど、大学のことなんて何にも知らないんですよ、言うわけです。そうですね、まあ、先生と話しているうちに、「一日大学生」というアイデアが浮かんで、土屋小学校と吉沢小学校の五・六年生を一日招待するということにしたんです。初めてやった時に、父母の方もいっぱい来しましたよ。その時に、最初の講演だからだれにお願いしようかいろいろ

ろ考えて、附属学校の青柳昌宏先生にペンギンの親子という話をしていただいたんですよ。あの先生、南極にペンギンの調査で行ってますしね。

**日野** 小学校の教科書にも載っていましたね。

**木川** 大反響でしたよ。とくに理学部の実験。液体窒素でバナナを凍らせる。あの時、日野先生が、メダカの孵化していく過程を実物を示しながら説明してくれて。これが何日目、これが何日目というふうに。それが非常に好評で、多くの印象からいうと、それ以降、地域の人の大学を見る目が変わってきましたよ。

**杉谷** ああ、なるほど。

**北川** そういうことだよな。

**海老澤** 地元の田植えに学生がお手伝いに行っていたんですよ。無料でね。労働提供していた。

**日野** いまも平塚市と東海大学と神奈川大学とで里山をよみがえらせる取り組みをしています、「里山里山再生プロジェクト」という名の二〇〇四（平成十六）年から毎年実施している交流事業なんです。ちよんどう先週は地域住民と協働で稲刈りを行いました。あともう一回、収穫したもち米で餅つきをしました。カンザス大学の学生が来る頃に田植えをしまし

た。いや、帰る頃でしたか。

## 横浜キャンパスとの連携

木川 これまで、横浜キャンパスとの対立であるとか不協和音みたいな、どちらかというと、よくない側面が話題に上りましたけれども、実は、このキャンパスができてからは横浜キャンパスの先生方にもいろいろな面で協力をしていただきました。このことについて述べたいと思います。いくつかあるんですが、ここで一つ紹介したいのは教職課程認定申請の件で横浜キャンパスの先生方にお世話になった話です。

一年目、開設して間もなく、教職課程設置申請の話が出るじゃないですか。理学部の服部明彦先生からほかのところへ話がアツたんですが、それが五月か六月のことで、この新入生が落ち着いてきた頃、課程認定の申請をしなければいけないというこの相談がありました。でも、申請をしようとしても、平塚には教職課程の先生がだれもないわけですよ、教職の専門の先生が。それで、文部省の教職員課に相談に行ったんですよ。で、苦肉の策じゃないですけど、神奈川県大学って横浜と平塚にあつて同一キャンパスなんで

すよ、とおっしゃるわけですよ。横浜には教職課程委員会というのがあり、教職課程がちゃんとあるのだから、その先生を説得する以外ない、と言っんです。初めて横浜の先生方にお願ひした時にはびっくりされましたよ。えーっ、平塚までっていうような感じでした。その教職の先生の同意を何とか取り付けて、横浜から先生方に来ていただいた。教職に必要な専任の先生は何人という決まりがありますからね。初めはそれで開始し、鈴木そよ子先生が教職の専任教員として就任されたのが三年目の一九九一年なんですよ。

大橋 ああ、そうなんですか。

木川 そう、それまでは横浜の先生にずいぶんお世話になってるんですよ。

北川 何ていう先生でしたっけ。

木川 教育原理の村田泰彦先生や教育心理の小池榮一先生です。それで初めて教職課程の申請というのができたんですよ。教職課程の設置については横浜の先生方に大変お世話になりました。

大橋 そうですか。週に一回とか、こちらに来ていただいて……。大変な恩義を受けているわけですね。

木川 そうです。

動き始めたのが五月で、それで文部省に申請したのが十月の三十一日、ギリギリで。二年目から教職を取る学生の履修が可能になったのです。そのあと、鈴木そよ子先生がみえて、こちらでも体制が整ったけれども、その後も横浜におられる大森新一先生だとかいろんな先生方に助けられましたね。

教職だけでなく、大学院の設置認可申請の時もいろいろ大変で、その当時の手帳を見ても、大学院の申請の直前など、一週間のうち五日ぐらい文部省に行っているんですよ。ここでも、やはり、北川さんや横浜の先生に力になっていただきました。

## 学生募集、昔といま

杉谷 いろいろ大変だったけれども、山口和夫先生をはじめとしてわれわれ教員も頑張りましたよね。学生集めのためにパンフレットを持って高校まわりましたね。こんなことまでやるのかなあ、なんて思ったけれども、山口先生が一生懸命音頭を取るもんだから、みんな得手分けして、そういうことやりましたよ。

山口 教職に就いている神奈川大学の卒業生、たくさんいますからね。

北川 そうらしいですね。

山口 私の研究室の卒業生も、夫婦そろってうちの研究室の先輩後輩なんですけれども、その子供がいま平塚祭の時に来て、受験を考えている、と。ああ、そうなんだ、と。

杉谷 いま学生集めという観点からいって、どうなんだろう。安定路線になっているんでしょうか。

山口 どうですかね。

日野 人口が減ってきているから、大変なんだけれども、でも、そのみなとみらいで経営学部は倍率がガンと上がりましたよね。

杉谷 上がってますか。

山口 経営学部はすごかったですよ。

大橋 われわれの考え方はと申せば、ただ、場所が変わることだけがその理由とは思っていません。去年、おとしあたりからですかね。とくに去年は非常に倍率が伸びて河合塾の偏差値みたいなのもいま非常に伸びて、外国語学部が一番上と一緒ぐらいのところまできています。二〇一八（平成三十）年度入試からプラスに働いて、受験生は増えています。AO入試も、この前、二十人アップでしたので、学生募集という意味

では、いまのところ苦勞していません。

逆に、すごく大変だったのは新学部の際日本学部を立ち上げること、その申請に絡んで定員管理をしつかりしなければいけないということがあって、どの学部でも一人でも定員をオーバーしたら、アウトだということを言われて、それで、とくにこの前の入試の時には定員の管理をものすごくタイトにやって、仮に合格した人が全員来たとしても、定員をオーバーしないというような形で入試の選考を行いました。

杉谷　すごいですね。

### 情報科学科の変遷に映し出された理学部の歴史

山口　情報科学科の話に移りたいと思いますが、よろしいですか。

日野　理学部で一番変化してきたのは情報科学科です。から、理学部の歴史がよくわかる学科ですね。

山口　理学部は、三学科になってしまつて、できた時から家庭内別居が始まつて、情報科学科は晴れて離婚が成立して、情報（情報科学科）と数物（数理・物理学科）に分かれた、と。でも、数物の中でも家庭内別

居が始まるんじゃないか、という話で。前とはちよつと違うけれど、できた時から、あの時は五を無理やり三つにしなさいと言われて、いろいろあつて。それを全部しよい込んでいたのが情報科学科ですよ。化学と生物は比較的単一で、生物は応用を取るとか、ついでいるのが嫌だとかいろいろながあつたけれども、そのあとはみんな情報と数学と物理が全部一緒になつていたわけですよ。それでいろいろ……。

日野　教養を担当する先生も小幡行雄先生とか、理系の先生の中で、情報科学科の相馬純吉先生もそうですね。それで逆に、生物の学生が相馬先生のところで卒業研究をやるなんてことが、最初の頃から主任預かりにしてお願ひしちゃったことがありました。つまり、届出上では教室というか一般教養の担当ということだったんでしょうけれど。最初の頃の教員組織としては共通教養委員会といたしましたか……。

山口　共通基礎と一般教養と二つのカテゴリーと、あと三学科があつたんですよ、その中に。

中山　当初の構想は五学科でしたっけ。宮澤先生のメモをちよつと見たことがあるんですけども、物理学科をつくるっていう話があつたんですよ。

日野 いつ頃の話？ 宮澤先生ですか？

中山 ええ、宮澤先生。それがうまくいなくて、情報科学科なら通るということで、情報科学科にしたというんですけれども。教員については物理の先生をさきに確保していたというか。そんな感じだったんですね。情報の教員は、まあ、何ていうか、ほくが来たのが、最初だったわけですけども。ほかにいないということもあったと思うんですけども。一般教養とか共通基礎でしたっけ、そういうものを含めていろんなことをやらされましたよね。大変だったですね。つまり、物理の先生がいっぱいいたんですけれども、そういう人たちの科目を肩代わりすると、そういう感じです。教員自体はだから、情報の教員が少なかったです。

物理の先生の中でどういう話が出ていたのかよく知りませんが、最初の頃は、分かれるみたいな話はあるからさまには出ていなかったように思うんですけども。だんだんそういう方向になってきた。で、情報の教員の中にもですね、一緒にやっていった方がいいんじゃないかみたいな人もいるにはいたんです。数理情報科学科、みたいな。

山口 大学院は五領域ですから。一専攻ですけども。数学と物理は一応別々にして、数学、物理学、情報科学、化学、生物科学の五領域です。私が研究科委員長の時にしたわけです。

杉谷 それだけそろってりゃ、りっぱなもんだね。

日野 あと、地学が足りませんよ。

杉谷 あつ、そうだね。そう。

日野 理科の教員免許を出すというのが工学部といま一番違うところなんでしょうけれども。

### 今後の展望

山口 中山先生。情報科学科の今後の見通しについてですけど、いかがですか。理学部が向こう（横浜キャンパス）へ移る時にどうするか。とりあえずみんな一緒に、情報科学科も理学部の中に残ったまま移るという形で、だいたいそうなりつつあるというか、なっているんですけども。どうですかね、将来のこと。先輩の目から見た時に。

中山 学生の需要ということでいえば、ちゃんとした学生が育てられれば、拡大するっていう手もあるんじゃないかと思うんですけども。ただ、競争が激し



いですからね。そうじゃなければ、理学部の一つというか、理学部が一学科になるのかどうか知りませんが、それでも、その中にいてもいいんじゃないか、そういう手もあるんじゃないかと思えますけれども。

山口 もう、だいたい一学科にするということにはしたんですけれどね、理学部は。一学科の中でということで、カリキュラムも副専攻みたいなものも含めて、いろんな人がその中で履修ができるようなふうに。その中に地学も入っていたり。それから、情報とたとえば、数学が連結するとかいうようなことがあるんですけれども。

中山 情報科学科にもいろんな学生がいるので、そういう形のカリキュラムはうまくやれば、よい結果につながると思いますよ。

山口 だから、いろんな学生に対応して……。完全にガチッと固まっているのではなくて、やはり周辺とのいろんな分野を繋げて情報をやる人もいれば、本当に情報科学だっという学生もいて。一応、そういう方向には多分なっていくと思うんですけれどもね。

杉谷 そうですね。そういうのがいいと思いますよ、本当に。どれも欠かせないよね、いまや。情報、物

理、なくすわけにいかない。化学、なくすわけにいかない。生物、なくすわけにいかない。地学だって大事ですよ。

お話にあった、全体をまとめて三専攻から一専攻五領域にする大学院の改組、あれはいいと思いますよ。そういう格好で、そういう東ね方で行けばいいと思いますよ。こんにちではやはり、一つの領域に限ってられないですよ。みんな必要なんだから。

山口 そうなんですけれど。理学部、大学院への進学者がだんだん減ってきてるんですよ。私が研究科委員長になってからどんどん減っちゃって。

木川 寺本先生が学部長の時、修士まで含めて六年間を一貫した教育課程でというような話もありましたよね。学部全体で話が進んでいたかどうかは知りませんが、けれども、寺本先生の構想の中にありましたよ。

山口 まあ、やっぱり親としては四年で卒業してちゃんと稼いでくれ、となってくると思うんですよ。

杉谷 そうですよ。それはあるだろうなあ。

山口 大学院に行った方が長い目で見した場合、いいよということの説得力がどれだけあるかということなんですよ。

## 両学部連携により生まれた文理統合型講座

**海老澤** 学部レベルの話で申し訳ないんですけども、「循環型社会論」という講座をまだ、いまでもやっているでしょ。あれは、われわれが学部にいる時に理と経営のジョイントの講座としてスタートしたユニークな授業でした。循環はつながっていて分離できないから、特定の科学で考察するには、限界があるのでは、ということが話題になりました。しかし実際には、自然科学や生命科学もある理の方が関心度が高く、受講生も多くなっているのではないのでしょうか。

**大橋** そう思いますね。

**日野** 平塚市の確か環境部の方とか。

**海老澤** 来てる。確かに来てる。社会人の方が講義の一部を担当してくれています。

**日野** いま気が付いたんですが、最近になってSDGsという言葉で地球温暖化対策や環境保全が叫ばれています。十五年以上前から平塚キャンパスでは、「循環型社会論」として授業が展開されていたわけですね。

**山口** 結構、理学部いろんな学生いますよ。副専攻で

経営の科目取ったり。

**日野** 副専攻でずいぶんお世話になっている。

**山口** ところが、今度、移転して別れちゃうから。離婚しちゃうから。そしたら、困っちゃう。

**大橋** 離婚じゃないよ。

**山口** 円満何とかじゃない。

**大橋** 遠距離通勤。

**海老澤** 人間の移動だけですればいいじゃない。手間ひまかかるけど、移動することによる新鮮さとの遭遇も体験できるのではないのでしょうか。

## 経営学部のユニークな成り立ちと

### 教育における斬新な取り組み

**大橋** いま理学部の話をいろいろ聞かせていただきましたけれども、せっかく三村先生、海老澤先生もいらっしゃっているので、お話を伺ってみたいと思います。さきほどちょっと経営学部という名前になったいきさつについてお話がありましたが、当初から国際経営という名称が出ており、お二人ともご承知のとおり、経営学部の中でも国際っていうのと経営っていうのと、二つに学科を分けちゃったかどうかという話が

出た時期もあったと思いますし、それはずっと尾を引いていて、いまでも似たような状況だね、というご指摘を何人かの先生からもいただきましたけれども。その辺のことというのはいかがでしょうか。

経営学部というのは、典型的な経営学部の学部体系と比してどうなのか、設置科目や教員の専門分野の散らばりを考えた時に、これで普通なのかと疑問を持つくらい独特な組織と見えるようなのです。五十人のうちの半数はいわゆる経営プロパーで、残りは国際とかいろいろ雑多というか、そういうので。私が来たのはできてから七年ぐらいたってからなので、さきほども文章を読んで紹介しましたけれども、その辺は実はよくは知らないんですね。ただ、自分が前にいた組織と比べてみて違うなど、非常に特徴的な組織だなと思うのは経営学の専攻科目を担当するいわゆる経営プロパーの人たちとそうでない人たちとの区別がほとんどないみたいな形で、全員体制で学生教育に当たること、たとえば、FYS（ファースト・イヤー・セミナー）みたいな、当時は基礎演習といっていましたけれども、そういった演習ゼミを、いろいろな人が担当していて、必ずしも国際系じゃなくても多くの教員が

海外研修に学生を連れだしたりとかしている点が大きな特徴なんですね。総合力というか、全員でそういうことをやってきたという……。いま、学部長をやりだして、横浜の方へ行って感じるのには、学生教育に対するスタンスの違いというか……。おそらく、われわれは、専門分野を共通軸として学部を統一してきたのではなく、同じ学生を育てるということを旗印としてまとまってきたので、常に学生教育が何かということを表立って言えるみたいなところがあって、逆にそれを横浜で言うのと、恥ずかしいみたいな感じがあるんですよ。

杉谷 ふむふむ。

大橋 横浜で学生教育が第一だと言うと、ちょっと軽蔑的な目で見られるような雰囲気を感じる場合があります。お二人はいわゆる経営プロパーのほうだと思っ

んですね。いま、多くの場合はもともと専門的には言語系で、教えているのは英語の科目だったりして、いろいろな行きがかりの中で経営学部長なんかもやっているわけですが、それ自体がすごく異色なわけじゃないですか。そういう学部の特色というものをどういうふうに捉えてらっしゃったのかなあとか。

海老澤 国と国との間、つまり、ナショナルのインタールが「インタールナショナル」になります。国境では、防衛、攻撃をめぐって紛争が絶えません。現在は、地球全体の視点、「グローバル」な視点を持つことが求められている、と思います。つまり、球、球体として地球を考える発想です。理からの構想が必要なのかもしれません。理では、地球全体の生き物を考えているわけですから。むしろ新しくつくっていくんだったら、「インタールナショナル」じゃなくてね、もう少し地球を他の星から見ると感じの経営ということ、いいんじゃないかなと思っています。

大橋 いまおっしゃっていることというのは、国際という概念自体の「デフィニション」をより広い視野に立って地球全体を包括する形で発展的に捉えるべきではないか、ということではないかと思うんですけれども。ただ、結論からいうと、二〇二一（令和三）年に移転する時に、国際経営学部という名称に変更の申請をするということはすでに決められているんです。

海老澤 ほう。

大橋 だから、先生の新しい学部の名前の提案があったとしても、実際には国際経営学部になって行かなけ

ればいけないというのが決まっています。国際経営学部になるに当たったのカリキュラムをいま構築中です。ぼくがさきほどの質問で聞きたかったのは、そういった独特の体制でやってきた経営学部ならではの教育に価値を見いだしているのか、それとも、逆にあればまずかったという反省があるのかという点です。もう先生方にとって過ぎ去ったことかもしれませんが、思い出していただいて。ずーっとこういった形で三十年やってきているわけで、真面目な顔で、とにかく学生教育だと言って、教育に力を入れてきた学部なわけですが。

北川 反対に、話していると、私は研究者で、教育者ではないってことをよく言う人がいますね。

杉谷 そういうことが、そもそも授業の持ち方とか、もめごとの原因になっているということ、以前、聞いてましたよ。教育は他人まかせで、自分は研究オンリーというのはおかしいなあ。

北川 貿易学科というのがあって、日本中で神奈川大学にしかなかったんですね。その後、当時の紅陵大学（現・拓殖大学）と福岡大学、それに旭川大学、第一経済大学（現・日本経済大学）に貿易学科ができるん

ですけれども。それでも、当時、貿易学科のある大学はめずらしくて、私学では数えるほどしかなかったわけですよ。

国際経営学科と貿易学科との関係はどうなんですか。貿易学科はなくなりましたけれども、その辺のしがらみというのはないんですか？

大橋 しがらみっていうか、そこうちの経営学部との区別がつかないという話はよく出ます。

海老澤 横浜の貿易についてあまり意識ないでしょ。平塚にいたから。もともと。

大橋 かつて非常に輝かしい学部があり、そこに優秀な学生たちが集まっていたというようなこととか、貿易学科出身の先生もおられて、短大の先生でしたけれども、こちらに來られた岡本祥子先生もその学科の卒業であるとか、そういった話はよく耳にします。それが出てくるコンテキストというのが、昔輝かしかったものがどうしてこうなったのかと、そういう流れで出てくる、そういう形で話題になるということもよく聞きます。

北川 自分は貿易学科の卒業ですって、胸を張って言いますもんね。

木川 当時の貿易学科の強みというのは、結局、語学なんですね。語学教育にはとくに力を入れていたんです。貿易学科は当時、英語十八単位、第二外国語十二単位が必修で、さらに商業英語や専門科目など卒業に必要な総単位数は百六十八単位、しかも必修科目が圧倒的に多かったんです。全国の商業英語の検定試験でも常に抜群の結果を残していました。

海老澤 いま出た語学との関連でいうと、「ビジネス」の語源が気になって調べたことがあります。『忙しい』『ビジー』という意味がありました。「ビジネススクール」は日本語では『忙しい』学校となります。学問というのではなくて、人間系の中で、人間の活動の中でそれをどういうふうに理論的にやっていくかということをもっともっとアピールしていいと思いますね、社会科学の一部ですから。理学の自然科学も経営学の社会科学も、ともに人間系では共通の土俵で研究を重ねています。ある意味では、矛盾に富んだ生き物であるということとでスタートする方法もあるかな、とちょっと思っています。

私の周囲にもビジネススクールを修了した社会人が何人かいます。「修論のテーマは？」って尋ねると、

「修論はありません」という返事が戻ってくることはありません。ビジネススクールによつては、修士論文の提出を義務づけていないところもあるようです。講義中心の単位取得で学位が取れてしまう。

現在は地球上のみならず、宇宙まで含めてゴミの山になりつつあることを指摘する情報が日常的にあふれています。気候風土も変化してきています。そのような社会現象、環境変化の中で、どのような貢献ができるかが、大学にも問われてきているように思います。

得意分野を相互に強調し、不足分野を相互に補完し合いながら、より高度な総合的判断を意識した過程が、「循環型社会論」では組み込まれていると言つても、過言ではありません。人間系と自然系を基幹にした二つの学部得意技を合体させ、一つの学問に昇華させている、とも言えるのではないのでしょうか。

歩むべき今後の進路について

——学部伝統と新しい動きのはざままで——

大橋 学問分野の融合という点に関係すると思います。先生がいらっしゃった時とあまり人員配置は変わっていないと思います。悪い言葉かもしれませんが

れども、雑多な集まりだとはたから見たら見えるわけですよ。しかし、それについていうのは、多様性のもたらずそれなりのアドバンテージがあったとお考えですか？ それとも……。ただ、この学部の人員構成はあの意味で偶然だったとも、ぼくは聞いていて、たとえば、語学系の人間は、理学部に所属する話だってあつたと聞いています。結局、経営学部に着ち着いているわけですけども、一般的に言語系の教員は国際教育に貢献しやすいので、そこが動いていたというのもあるんでしょうけれど。いろいろな人がいたというのは、それを資産と捉えてもまず差し支えないのではないかと思います。ここで、このような見方を示したのは、伝統的な経営学部というものに戻していこうという動きを強く感じているからで、それというのは、先生なんかからすると、どういうふうに感じるのでしょうか？

海老澤 冒頭で話したあの異種性とか多様性のキャパシティということではないでしょうか。食べ物でいうと、ごった煮、けんちん汁とかの、世界なんですよ。海のもの山のもの動物系とが混じり合つて、第三の味が出るようになります。いろんなものを一緒に混



ぜ合わせることによって、新しい色、新しい味が出る、いや、出てくるはずです。色だって単純な色同士を混ぜることによって、第三の色が出てくるからモザイク模様になります。そういうのを思い切つて、試みたらどうでしょうか。私は赤、あなたは青、両者を混ぜると紫になる、とかね。そういう発想でいけば、何とか新しい道が拓けるんじゃないかと思います。

大橋 いまがそうなわけですよ。そうじゃないと、これまでの経営学部も成り立たなかつたと思います。しかし、大学の将来構想等の中で、学部人員構成的には、これまでの学部の伝統の維持が危ぶまれる流れが生まれている感もあります。たとえば、共通教養センターが新たに設置されたことにより、将来的に学部教員のほぼ半数に当たる共通教養系の教員が共通教養センターの所属とされて、学部とは切り離されてしまうのではないかという危惧があります。それと入れ替えにさきほど話題にもなった経済学部の現代ビジネスの一部の教員を取り込めば、伝統的な経営学部の人員構成には近くなるかもしれません。

もう一つの特徴として、経営学部は健康科学を必修科目と位置づけて、常に身体性を重視してきた伝統が

あります。たとえば、新入生とオリエンテーション・キャンプをやつて集団で教員も学生も一緒に合宿したり、机に向かつての学修というのもありますけれども、やはり身体を動かす中で自分を知り、他との信頼関係を築くといった教育活動を重視してきました。身体活動を伴わないビジネスはあり得ないという考えが根底にあり、そういう意味で体育教育は経営学部にとつては非常に重要な役割を果たしてきました。学部のコース制の中にもスポーツマネジメントコースなどができた時期もありました。しかし、新キャンパス移転後は運動スペースが限られることから、体育教育もその役割の再検討を迫られています。ただ、資料などを見てこれまでを振り返ると、大綱化の結果、既存の学部教育の限界が指摘され、いわゆる伝統的な学部教育に対して社会変化に対応するためにより自由な教育課程が許されるようになり、学部にも多様性が認められるようになった時、さきほど木川さん、北川さんからもお話しいただきましたけれども、まさにそういう流れに乗ってチャレンジしてきたのが経営学部の三十年なんじゃないかと思うわけです。



最後に、三十年を振り返って

日野 話は尽きないのですが、よろしければ、最後に一言ずつお願いいたします。

私からお話ししてよろしいでしょうか。令和の時代になって、まだしばらくは両学部ともここに、このキャンパスにいますけれども、これってちょっと普段は公にはしない話かもしれませんが、平成の時代三十年間このキャンパスの中で大きな事故や学生の自死っていうのは職員も含めてないと思いますよ。多分これ、とてもめずらしいキャンパスだと思いますよ。

木川 ぼくは平塚に九年半いたんですよ。平塚はよかったですよ。面白かったですよ。当時、大変だったこと、苦しかったことはみんな忘れちゃったんですね。このキャンパスって、経営学部の先生、理学部の先生、職員、皆が一体になってここをよくしているという思いが強かったんです。父母懇談会も経営学部の先生方が始めたんです。実は、創立者の米田吉盛先生の頃は全国的に開催していたんですが、当時は横浜も一時ストップしていた時期でした。事務局、結構、少人数で大変だった時でしたから、経営学部の先生が

自ら父母宛てに手紙の宛名書きから企画・実行まで全て行われました。F O C (フレッシユマン・オリエンテーション・キャンプ) だってそうですよ。

北川 ホームカミングデー。これも平塚がさきだったよ。海老澤 インターンシップも、うちが初めてですよ。

新しいことドンドンね。

木川 ドンドンやっていった。

北川 図書館の、いわゆる、当時の言葉でいうと、電算化っていうのかな。それも平塚の方がさきですよ。

木川 ぼく、さつき、平塚反対してましたって言ったけれども、実際は、本当にこのキャンパスに来てよかったですよ。そりゃ、先生方が熱心でした。神奈川大学の場合は定期試験の前・後期いずれかを欠いた場合、単位は出ないんですよ。あの当時の履修規程では。いまはどうなっているか、ぼく知りませんけれども。ただ、当時はそうだったんですね。開設当初はいろんな大学から、先生方が集まってきておられるわけじゃないですか。ですから、初めの時、詳しく全部説明するんですけども、びっくりする先生もいらっしやったわけですが、教務に成績を提出する前に、自分たちで何回も追試験やったり、あるいは補講をした

りして、締め切りギリギリのところでは採点をもらったということは、結構、理学部の先生の中にはありましたね。それだけ学生の教育には力を入れてきたということだと思います。ぼくは、とにかく、このキャンパス大好きだったですね。設置には反対したけれども。ここでの経験は本当によかったですよ。

北川 先生だけでなく、職員も学生を大事にしましたよね。まあ、あれやこれやと思い出は尽きませんが、せっかく立ち上げて三十三年でもう終わるのかと思うと……。

杉谷 ちよっと、残念ですよねえ。

北川 まあ、気持ちのうえでは永遠に続くと思っています。

日野 最後に、北川さんが本日の座談会を締めくくるのにふさわしい言葉で、このキャンパスに対する熱い思いを語ってくださいました。皆さん、それぞれに残る思い出とともに、少なからず寂しさを覚えておられるのではないかと思います。このキャンパスに寄せる思いは、この場を集っておられない方々もおそらく皆同じだと思います。それでは時間となりましたので、これで本日の座談会を終了することといたします。

す。長い時間にわたり貴重なご意見を聞かせていただき、ありがとうございます。先生方のお話が、現役の教職員だけでなく、今後の神奈川大学の歴史の中で必ず生きてくると信じております。



写真6 座談会出席者

左から、中山、三村、杉谷、海老澤、木川、日野、北川、山口、大橋（敬称略）

### 座談会を終えて

冒頭に申し上げた通り、この座談会は、平塚キャンパス設置計画から初期の様子を、神奈川大学の歴史として記録することを目的に開催されました。

一九八六（昭和六十一）年五月と十月に、法人の下に知識情報研究所と国際経営研究所が相次いで設置され、新学部設置に向けた準備が開始され、現在の学部・学科が設置されるに至る事情をお聞きすることができました。二〇一九（令和元）年十月に刊行された『神奈川大学90年のあゆみ』の「湘南ひらつかキャンパスのあゆみ」のページにおいて開設から現在に至るまでの状況を紹介していますが、今回の座談会では、開設時の話題が中心となっています。平塚キャンパス設置にあたっては、多くの方々のご尽力をいただいたわけですが、計画の初期段階での各種申請業務等に関わった方々をお招きできなかったこと、直接お話を伺うことが叶わなくなっている方がいらつしやることが残念です。

一九八九（平成元）年に平塚キャンパスが開設された後、大学院の設置、定員増、「湘南ひらつかキャン

パス」にキャンパス名変更、数理・物理学科の増設、国際教育の充実など、経営学部、理学部、事務局の枠を越え、構成員が一丸となり、また、地域の方々にも支えられて今日に至るまで発展し続けて来ました。しかし、みなとみらいキャンパス開設に合わせて、経営学部がみなとみらいキャンパスへ、理学部が横浜キャンパスへ移転することが決定され、三十余年にわたる湘南ひらつかキャンパスの歴史に幕を下ろすことが決まっています。

湘南ひらつかキャンパスにおける教育研究においては、経営学部における国際教育やインターシップ教育などをはじめとする、全学の先鞭となる教育が行われてきました。理学部では、ハイテク・リサーチ・センター整備事業や私立大学戦略的研究基盤形成支援事業などの大型プロジェクト採択などを中心に教育研究に大きな成果をあげてきました。さらに、課外活動においても学生たちが輝かしい結果を残してきました。

湘南ひらつかキャンパスは、数年のうちに歴史を終えることとなりますが、すでに経営学部の嶋谷誠司教授から課外活動に関する記録を、佐藤武審議役から事務局体制に関する記録が提供されています。経営学部

については、二〇二一（令和三）年三月にみなとみらいキャンパスへ、理学部については二〇二三（令和五）年三月に横浜キャンパスへそれぞれ移転する時期が決まっているので、それぞれの学部の資料を集めておくとともに、今回の続編となる座談会を、別の参加者で行い、湘南ひらつかキャンパスの歴史を記録にとどめていきたいと考えています。また、今後刊行する予定の、『神奈川大学人物誌』の第三編において、湘南ひらつかキャンパスの開設・発展に寄与された先生方のご紹介をする予定です。湘南ひらつかキャンパスの歴史に終止符を打つことは寂しいかぎりですが、湘南ひらつかキャンパスにおいて刻んできたひとつひとつのことが、神奈川大学の将来に役立つことと思っています。

この座談会は、平塚事務部の協力のもと、大学資料編纂室が記録ならびに、テープ起こしを行いました。テープ起こしを資料編纂室の川口好孝氏が担当し、不明確な発言については事実関係の確認と発言者の了解を得たうえで発言内容を編集・訂正していることを申し添えます。

（木内）